1.5km²と非常に狭かった。このメスの遊動域はTK群の遊動域内に含まれていた。6月までのTK群とIC群の遊動域を比べると、同時期ではお互いに避けあっていた。

③1999年の調査時にはTK群の遊動域内で遊動していた単独オスHM2はTK群の遊動域を離れ始め、2000年11月以降は以前の遊動域から5kmほど離れた地域を遊動していた。

④一方、TK群に隣接した遊動域を持つ単独オスHM4は1999年の交尾期に一時、TK群の遊動域内に滞在していたことが解かっているが、2000年の10-12月にはそのような遊動域の一時的なシフトは見られなかった。

計画 8-1

中国地方東部におけるニホンザル地域個体群の分布調査

渡邊義雄（美作女子大）・林 勝治（広島県立大）

昨年に引き続き、中国地方東部において、ニホンザルの分布調査を行った。岡山県では、未調査であった9町村で聞き取り調査を行った。いずれの町村でも、群れの生息は確認できなかった。しかし、県東北部では、兵庫県からのハナレザルの侵入が推測された。まだ、未調査の町村があるが、昨年まで確認された以外には群れは存在しないと思われる。また、本年度は、1998年に行った質問紙調査のうち、被害状況の推移について分析した。群れの生息地を中心に20年前から被害の地域が周囲に広がっていることが分かった。被害が出始めた時期別に、その植生を分析した結果、自然林及び2次植生の割合は6割前後で比較的安定している。しかし、ここ数年前から被害の出始めた地域には、二次林の構成ではコナラ群落が少なく、一方で、農地が多く含まれていた。このように、近年になって、サルによる農地への被害が広がっている様子が分かった。

鳥取県では、日野町と八東町周辺の地域を中心に聞き取り調査を行った。この2町以外では西部の江府町にニホンザルの群れが生息しているとの報告があった。また、鳥取県公文書館において、各地の町誌を閲覧したところ、1970年くらいまでは、大山町・若桜町・国府町・河原町に群れが生息していたようである。

計画 8-2

丹沢東北山塊におけるニホンザルの生息と人間活動の影響

福田史夫（共立薬科大）

聞き込みと踏査に基づいて3群の生息が明らかになり、さらに複数群のフィールドサインによる情報を得ることができた。調査地域内ではM群のみが野荒らしをしており、隣接するU群を含めて他の群れによる野荒らしは生じていない。

1) 道志川側の集落でM群による猿害が生じていないのは、道志川側はスギの植林が山麓まで被っており、しかも、北に面した山麓のため冬季は寒く、サルにとって利用する自然の食物がないためであると考えられる。東部の鳥屋地区は道志川側と同じように麓まで植林に被われているが、冬には日溜まりとなる南山や仙洞寺山があり、しかもその間に集落があるため、M群のサルたちにとって移動の際に農耕地に侵入できる地形となっている。2) 野荒らしをしないU群とM群の、行動域内の人間活動の違いは、行動域内の集落農耕地と猟区の有無である。U群の行動域内の80%以上が猟区になっており、集落農耕地は皆無である。が、M群の行動域の10%弱が猟区に組み込まれているだけである。猟期の週末はシカ、イノシシや鳥獣が行われる。そのため、